

東日本大震災とスーパームーン



宮地 智子

(詩人)

二〇一一年三月十一日の東日本大震災後八日目の成田国際空港はいつになく人が溢れ、異様な空気に満ちていた。日本に在住する外国人が、一日もはやく放射能に汚染された、この忌わしい日本から脱出したいという、焦りのエネルギーとでも言ったらいいだろうか。どの顔も火照り気味で幾分、目が血走っている。

アメリカのミシガン州イーストランシングに住んでいる娘一家のベビーシッターさん（日本人女性）が契約更新のために一時日本に帰国している間のピンチヒッターとして三月十二日か

ら数週間アメリカに滞在すべく旅装を整え終えた矢先のことであった。スーパーマーケットでちよつとした買物をしたその帰り道のこと、ぐらぐらと大地が揺れ始めた時はそれ程の驚きも恐ろしさも感じなかった。

たまたま竹藪に差しかかったところだったので、細い竹を掴んで立ち止まっていると、近くの工事現場で働いていると覚しき数人の若者が道路に出て来て一勢に携帯電話を取り出して家族の安否を確認している。随分大袈裟だなあと思ったのは、私が建物から離れていたので物の落下するところや、

ガタガタという物音を見聞きする場に遭遇することがなかったからだろう。嬉しかったのは、髪を金色に染めた若者が「竹藪は安全ですよ。」と声をかけてくれたことだった。

ことの深刻さに私が気づいたのはわが家に帰る途中の信号という信号がすべて消え、近所の人たちが皆道路に飛び出して道に人が溢れ、不安そうな表情をして互いに顔を見合っている光景を目にした時であった。車のエンジンをかけ、車の中のテレビで被災地の様子を伝えてくれる人もいる。ああ、水浸しだ！という声。恐る恐る家の

中に入ると、殆んど被害がなく、二階のわが部屋の乱雑に平積みにされた本が、ばらばらに床の上に放り出されている程度だった。やがて、インドネシア在住の次女から電話があったものの、職場が福島県にある夫とも、職場が東京にある息子とも、アメリカ在住の長女とも電話が全く通じなかった。電気が通じ、パソコンで連絡を取り合えることができ、家族の安否が確認できた時はほっとした。

さて、予定より一週間延ばさざるを得なかった出発の日、さいたま市にあるわが家から成田空港まで辿り着くことが大問題だった。交通網は平常通りでなく、用心のため、前日に東京の日暮里駅近くのホテルに宿泊した。成田空港周辺のホテルは満室で取れなかった。昼食を、このホテルのレストランで摂っていた時のこと、近くのテーブルには、もはや老人と言ってよい、下町の商家のご隠居さんらしい四、五人の男女のグループが、意気軒昂におしゃべりをしていた。〃菅さんも長く

持ちそうだね〃などと、現政権をしきに褒め讃えているのだ。

この、一〇〇〇年に一度と言われる大災害と、それ以上に深刻な原子力発電の損傷という恐るべき、国難に当たってなお、確実な対策を打つことができない現政権に対して失望し、怒りさえ覚えている私にとつて、彼らの余りに能天気な会話にめまいさえ感じたくらいだ。けれどこれもまた現実である、ということか。むしろ下手な義侠心などおこして被災地に出かけて行って足手まといになるより余程いいかも知れない。

さて、飛行機は日本を離れ十二時間後、ランシング空港に着いたその日は三月十九日。日本では全く話題に上らなかったが、十九年に一度、月が最も地球に接近する日だった。その月をアメリカではスーパームーンと言う。雲ひとつなく晴れ渡ったその日、夕闇の迫る藍色の東の空には皓皓と輝く満月が昇った。私は今でも、まるく美しくひかるスーパームーンの完全さの、ま

でこの世のものではないようなイメージを思い浮かべるとき、頭が熱を帯びるのを感じる。あの、伝説のかぐや姫が、生まれ故郷である月の世界に帰って行った時も、もしかしたら、こんな月の夜だったかも知れない。

さて、かぐや姫ならぬ、わが孫娘達の毎日はなかなか哀れである。朝目覚めた時にはもはや、両親は仕事に出かけていていないのである。けれどこれはもう、この世での彼女らの宿命であり日常である。ベビーシッターの代役として、おばあちゃん、朝ごはんのミルクやパンを用意し、食べさせ、歯を磨き、服を着換えさせる。〃かわいそう〃などという感情は彼女らの明るさ、したたかさの前で次第に薄らいでしまう。長い髪をポニーテールにして縛る時など、〃痛いよ〃などと喚こうものなら、こちらば〃女は我慢〃という呪文で応戦する。効果は靨面、ぴたりと黙る。どんな時でも、幼女も老女も、〃女は美しくあらねばならぬ〃と自分に呪文をかける。

バベルの塔 — 原子力発電所事故 —



杉本忠夫

(虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医)

本年三月十一日、東日本大震災の大津波で多数の方々が犠牲になられ、心よりお悔やみ申し上げます。

また、地震と大津波のため福島第一原子力発電所が壊滅的な打撃を受け、それにもなつて大規模な放射能漏れが発生し、放射能汚染から身を守るため広い地域の住民の方々が着の身着のまままで避難を余儀なくされました。

一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。そこで、原子力発電所のことについて少し振り返ってみてみましょう。

一九五四年ソビエトのオプニンスクで世界最初の原子力発電所が運転を開始しました。また、一九五六年西側諸国での第一号の原子力発電所がイギリ

スのコールドターホールで原子力発電所が発電を開始しております。

まさに、原子爆弾の脅威と正反対の立場で、原子力の平和利用が開始され、世界の原子力発電の幕開けとなりました。

しかし、原子核内の核反応をコントロールすることは極めて困難なことであつたようです。たとえば、その巨大なエネルギー、また核融合、核分裂の超スピードの反応をコントロールするのに必要な多数の配管だけについても非常に高温なためその材質の選択、配管走行など種々の工夫が施され、現在の原子炉の制御が可能になつたようです。

また、世界で唯一の被爆国である我

が国では、原爆の極限の悲惨さや、恐怖心などの核アレルギーが強く、世界で初めての原子力発電所の開業を複雑な思いで聞いたものでした。

当時の原子力の平和利用について国民の間ではその巨大なエネルギーのコントロールが容易にできるかどうか、また長期間の安全が保てるかどうか懸念する声が多数ありました。さらに、原子爆弾に流用されるのではないかと、いう不安な話などいろいろ意見が出されました。

当時、高校生であつた小生達の間でも色々な議論がなされました。

その中で人間は英知が優れており、今までもいろいろな困難な問題を解決してきた。したがって、近い将来、この巨大なエネルギーの原子力(核分裂)を簡単でかつ瞬く間に中和するようなことが可能になると期待し、原子力の平和利用に賛成することになつたように記憶しております。

そのような議論を踏まえて、日本では、一九六三年に原子力発電が成功し、一九六六年東海村原子力発電所が開業

しました。

ところで、ご存じのように核の中の原子は非常に微小なものです。したがって、お互いの原子は極めて近い位置関係にあり、しかも非常に沢山集まっております。一度、臨界に達すると次々と核分裂がつながってゆきます。

それをたとえますと、江戸時代の建物は燃えやすい木と紙で建てられておりました。燃えやすい木と紙で建てられた長屋に火事が発生しますと住居の密集地では防火用水の不足も重なって、あっという間に家々（原子）に燃え広がって（核反応が進行）次々と延焼し大火災（臨界）が起こることになります。この現象を利用したのが原子爆弾であり、あの気味の悪いキノコ雲を発生させることになるのです。

今回、原子力発電所事故の際に、約五十年前高校生時代に期待した英知を結集した原子力を中和するワクチンのようなものがあれば、爆発の被害は最小限に抑えられていたかもしれません。つまり、天然痘やインフルエンザワクチンが天然痘やインフルエンザの

爆発的な流行（原子炉の爆発）を有効に抑えられたように事故を最小限に抑えられていたでしょう。

地球のある銀河系では太陽のエネルギーに全て依存しており、そのエネルギーは、太陽の中心核で水素の熱核融合反応により絶えず供給され続けているといわれております。この水素の熱核反応により放射能、プラズマ、ニュートリノを多く含んだ太陽風が太陽から四方八方に吹いています。遙か彼方の冥王星まで届いております。幸いなことに地球はこの太陽風から守られております。しかし、月にはその一部の放射性ヘリウム3が堆積しているといわれております。

旧約聖書『バベルの塔』というよく知られた逸話があります。

天にも届くほどの高いバベルの塔を建設しようとしてバビロニア帝国の人々に神様が言葉に細工して塔の建設が進まないようにされたというお話しです。

原子力発電、増殖炉（もんじゅ）も太陽と同じ核分裂・核融合を行なうこ

とになります。この点太陽が神様で人間が作った原子炉、増殖炉もんじゅがバベルの塔になるかと思えます。原子炉を十分に制御できる（直ぐ放射能を中和できる）技術を持たない状況で巨大な人工太陽エネルギーを使うことに神様は大きな危惧を抱かれたのかもしれない。

ところで、原子力発電所の事故に見られるように、スリーマイル島原子力発電所、チェルノブイリ原子力発電所、東海村JCO臨界事故、福島第一原子力発電所など自然災害、施設のトラブルで制御不能になっております。このように放射能を次々と放出させることは将来、長年に渡って子孫や生物に放射能の災禍を残すことは困ったことです。

神様、太陽神に、バベルの塔の逸話のような警告を発せられないように、できるだけ早急に放射能ワクチンのような特効薬を見つけ出し安全な原子力利用体制を築き、また再生可能な代替エネルギーの開発を進めて頂きたいものです。

クルクマ

中西美子



今では、珍しくもないけれど、最初に見たときは、変な形の花だと思いましたが。以前、ジンジャーと呼ばれていた花とよく似てると思い、調べてみると、ショウガ科ウコン属という事でした。寒さと乾燥には、弱いもので、インドに生息してるそうです。

ウコンの根は、つまりカレー粉の黄色い色でターメリックであるわけです。薬効性も高くその成分を抽出したものは、ドリンク剤として人気商品になっています。お酒を飲んだ後によいのですが、ほかの薬との飲み合わせに注意が必要です。観賞用のクルクマは、花のように見えるピンク色の先っぽが、苞であって花は、隠れるように元のほうに小さく咲いています。花が目立たず苞等が美しい植物は、思いのほかたくさんあります。たとえばクリスマスローズやポンセチア、ブーゲンビリアなどは、みんな美しい苞や葉を花だと思っで見ているわけです。

人の縁 — 須知徳平氏のこと —



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}
（文芸評論家・
相模女子大学名誉教授）

今は昔、ある年の暮れ、作家の福田清人先生から「家で新年会をするから来ないか」という連絡をいただいた。

その席で、私の横に見知らぬ人が座った。その人は須知徳平といった。

隣合わせになったことから、須知さんは私のことをあれこれと聞き出した。

「生まれはどこ?」「北海道の深川です」「えっ—高校は?」「深川西高校です」

「ええっ!」

須知さん（本名、佐川茂）は、私の母校の深川西高校の国語の教師をしていたことがあり、私が高校に入る三年

前に退職して、故郷の陸前高田高校の教員となり、そのあとまもなく作家となるべく上京したのだという。須知さんは、私を教えなかったことを知り、「よかった」とつぶやいた。（よかった）

という思いは、私も同じであった。退職・入学時が少しズレていたことが、以後、私たちを親密にした。

私が地方の学校に勤めていたとき、

須知さんは私の家に泊してくれたことがあった。大泉滉（俳優・故人）と三人で、巣鴨の居酒屋で飲んだこともあった。

須知さんは、昭和三十八年、「春來る鬼」で第一回吉川英治賞を受賞している。私と知り合う以前のことである。

「春來る鬼」は、吉川英治賞を受賞した年に、小説「三陸津波」「南部牛方節」と併せて毎日新聞社から単行本として刊行されていた。そうして、「春來る鬼」は、松竹で映画化された。「須知先生、

作品を一つ書き上げたあと、どういうお気持ちになりますか」「私は旅に出なくなる。作品を書き上げて、何か失われた部分を埋めるために…」

私は十年ほど前から「図書新聞」で

同人雑誌評を書いている。東日本大震災のあと、同人誌にこの大悲劇を詩や歌やエッセイで綴る作品が多くなってきた。そうした状況を考え、私は池嶋洋次氏（勉誠出版代表）と話し合い、『大震災の記録と文学』と題する本を出すことにした。私は須知さんの「三陸津波」を収録したいと考えていた。

須知さんは昭和八年、十三歳のときに三陸津波に遭遇しており、「三陸津波」は須知さんにとって郷土に取材した最初の作品であった。その作品はご遺族の了解を得て、『大震災の記録と文学』に掲載することができた。

椎窓猛氏が「九州文学」第五三七号掲載の「気まぐれ九州文学館」で、偶然、須知さんの「三陸津波」を巨大津波来襲前に読もうとしていた「不思議な因縁」と綴っているが、雑誌は無数に存在するのに、たまたま椎窓氏の随筆を読む。これも不思議な縁であろう。『大震災の記録と文学』ができたとき、私は高校時代の恩師田中芳雄先生にその本を贈った。田中先生は東北大学を

卒業し、初めて社会科の教員として深川西高校の教壇に立った。当時、佐川（須知）先生はすでに退職していたのだが、田中先生は「職員室でよく佐川先生の話が話題にされていた」というお便りを書いてくださった。その手紙には、陸前高田高校の結婚したばかりの女の先生が、水泳部の生徒を避難させようとして、津波に吞まれて消息を絶つたという哀しい出来事も書かれていた。女の先生は、田中先生が小樽潮陵高校の校長の任にあったとき、同校の数学の先生（宇宙飛行士毛利衛さんの兄）の娘さんであるという。

以前、ある学会で、須藤宏明さん（近代文学研究者）と初めて言葉を交わした。「盛岡大学の須藤です」と言うので、「盛岡大学という」と須知さんがおられる？」と訊いた。須藤さんは、「私が須知さんの後任です」と答えた。須藤さんと言葉を交わしたのも偶然に過ぎない。これも、須知さんに関わる、不思議な縁である。話が廻行する。須知さんは盛岡大学

教授として赴任することになるのだが、「児童文化」という講座を担当することに、「児童文化って何？と訊きました」と話していたのを思い出す。

須知さんが盛岡と東京を往復するようになってからは、次第に交流がなくなっていくた。それでも、福田清人先生や右近稜氏（詩人）から須知さんが児童文学の方面で活躍している様子を聞いていた。

須知さんが他界する二年ほど前、有楽町線の池袋駅の改札口を出ようとしたとき、東武デパートの脇を歩く須知さんを見た。一瞬のことで、声を掛ける間もなく、長身の須知さんは足早に西武池袋線の電車の方へ歩いて行った。須知さんの姿を見た最後であった。奇遇ともいえる出会いに始まり、長い年月のうちに須知さんの作品を再刊することができ、それがきっかけで高校時代の恩師が、須知先生に関することを書いてきてくださる。今、人の世の不思議な縁をしみじみと感じている。

蝉とビール



夏に飲むビールは最高だ。蝉の声を聞きながら汗をかきながら、実家の縁側に両足を投げ出し、僕の手はグラスの表面に広がる水滴の冷えた

ラツとしてきた。そしてほんの少しだけ耳が良くなる。音が鮮明になる。他の器官は鈍くなるのに耳だけは冴えてくる。面

温度に幸せを感じ、その幸せが一杯注がれたビールを飲んだ。懐かしい家の檜のおいと田舎の風景が目の前に広がっている。

ひとり飲みつづけ二時間半、頭が鈍くなる。でもまだそれを確認できる。冷静にまだ判ると思う。ほんの少しだけ視界がかすみ、ほんの少しだけ頭がク

白いもんだ。いつも思う。まだ判る、と。

これ以上飲んだら面白くなくなる。このくらいの酒の量が楽しいのだ。ふと蝉の鳴き声に集中してみた。蝉はいつも鳴き声がかなり近い様に感じて、どの木にいるのかわからない。どの木にいるのだ？いつものまにか蝉を探していた。二時間も酔った頭でものを考えているところいう不毛な事に喜び、楽しみを感じてしまう。冴えた耳で庭に出て聞いてみた。いた、実家の庭の古い柿の木に一匹必死にしがみついていた。必死に鳴いていた。僕は蝉をつかんだ。蝉は泣きやんだ。どのくらいそうやっているんだろう？いつまでこうしているんだろう？いつまで…

佐川毅彦

学問美談



志村栄守
(評論家)

民放が、悩みごとの相談に答を三通り用意して、選択式でベストを決めるという番組をやっていたが、いかにも時代を感じさせた。

人生の真摯な問題と、ゲームを楽しむ感性の混在を、そこに見た気がしたからだ。

その中で、こんな父親像が紹介されていた。高一の娘の心が自分から離れて行くのを怖れて、今ではお互いを名前と呼び合い、友達のような関係を築いている、と。

小林秀雄の『考へるヒント』の中に、『好き嫌ひ』という小品がある。

「義人秀才は、いくらでもあるが、徳を好む事色を好むが如き人物は、未だ見ず、といふ。この有名な言葉は、

論語に二度も出てくるし、已んぬるかな、と嘆息してゐる程だから、これは孔子の余程大事な思想だったと考へて差支へあるまい。」

ここを、小林の文章としてはごく平凡、あるいは下世話な話とすら見て、足を止めることもなく、安易な気持ちで通過していた長い期間があった。ところがある日、ここの小林の心中が明らかに感じられる気がして、我ながら少し舞い上った気持ちになった。

「二度も出てくる」と「孔子の余程大事な思想」は、事実あるいはその時の小林の感じたままには違いないのだが、この人に限ってはこれが微妙なのだ。言葉の背後に、その叫喚するところが、このように読めるのだ。

それは、「徳」という発想を社会からほとんど消し去ってしまった、時代の精神性に対する大いなる疑念、これが小林を動かして書かせた。これが孔子の言葉を拝借して、小林的に吐露されているのだ、と。

なお、「徳を好む」は「徳を積む」と言い直してみると、よりこの発想を身近かに、リアルに感じ取れる気がする。ともかく小林の胸中をそのように思ってしまうと、確かに気になる事象ではある。

さて、今、世相にあつては、社会貢献とか奉仕活動というかたちで、人間の善意が発揮される感動的なシーンを多々、目撃する。

しかし一方では、かつてない不運な状況が頻発し、大方の常識が見落して来た大切なことがあるのかも知れない——こんな反省が、社会に芽生えていると思えてならない。

で、先刻の、自らの子女と友達関係を築いているという父親像に、この時代の象徴を見る気がしたのはこうだ。

もちろんそこに、ある種の幸福感は推測できる。しかし、それ以上に気になるのは、ヴェジュアル機器の著しい向上は、人間から想像力というものを滅殺していくらしい、という疑念を覚えることだ。

小林『故郷を失った文学』にこうあるが、利便性にもたれて生活する現代人の多くは、敬遠して通り過ぎるのだろうか。

「歴史はいつも否応なく伝統を壊す様に働く。個人はつねに否応なく伝統のほんたうの発見に近づく様に成熟する。」

もちろん小林の文章ゆえ、この「伝統」を、国家とか社会という単位で考えていても、何も見えては来ない。人間各人の私的「伝統」と解して、初めて何が彷彿とする。

ここで要求されるのは、現代ではまことに流行らない想像力の發揮だ。

例えばの話だが、目の前の弟妹や子供は、私的「伝統」の最先端を生きつつあるのは当り前のこととして、もっ

と踏み込んで、その存在は逆転した祖であるかもしれない、と、そんな仮説を心に秘めたとしても、人間ならばこそ、と言えなくもない。

やがてこのことは、小林『ヒューマニズム』のこのこと、きわめて強い相関の下にあると気づかされる。(「彼」は『近江聖人』こと中江藤樹を指す)。

「彼は、永年の思索の結果、自らの学問の体系は、「孝」の原理に極まる事を思つてゐた。」

また、これに前後してこのようにも書く。

「一般に誤解されてゐるやうに、(中略)孝行美談ではない、と思ふ。言はば学問美談と考えなければ、どうしても解らなくなるものが、其処にある。」

「孝行美談」「学問美談」は、この人特有のいわゆる造語だが、その文章展開の典型のような箇所でもある。もちろん、いつもの通り詳しい説明めいたものはない。

ただ、言わんとすることは、おのずと分る。前者が、自然発生的な親孝行

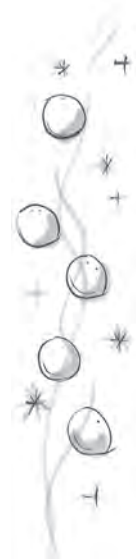
を指し、後者はこう読める。中江藤樹の「母親を養ひたいという願ひ」から決行された脱藩は、その陰に、孔子の時代から人間存在と深く係わつて来たであろう「徳」という思想が、強く働き掛け、あるいはそれが自覚されつつ実行された、小林はこれを言いたいのだ、と。

翻つて、小林秀雄の畢生のテーマと言えば、ドストエフスキイについての論述に影のように付いて廻るもの、と日頃、思っているが、後半の『考へるヒント』にも、私達がより良く生きるための何かがいくらでもある。

ここでのハイライトは萩生徂徠だが、『近江聖人』を介しての「孝」についても、小林は長年、心に秘めていたと思われる。

それはともかく、「伝統のほんたうの発見」すなわち「個人」の「成熟」とは、「徳」という思想の獲得でもあり、また、「孝」の原理に覚醒することでもある、小林はそう言いたかったのかも知れない。

パチンコの罪罪



桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

節電対策がらみで石原慎太郎東京都知事が「パチンコ不要論」を言い出したのは、もったもな部分もある。パチンコ店と自動販売機が消費する電力は、福島原発の電力供給量に匹敵するという計算があるらしく、その通りだとすれば、実に無駄な電力消費のように思える。知事には「パチンコは高尚な遊びとは思わない」という考えがあるようで、それが無駄に電力消費を続けているのは滑稽という捉え方だ。

確かに猛烈な騒音とフラッシュ電光ともうもうの煙草の煙の中で、機械が弾き出す小さな鉄の玉の流れを追っているだけという遊びが高尚とは思えない。ならば何が高尚か、と問われても

困るのだが、高尚ではないという意見には賛同者が多いのではないだろう。最近の事情には疎いが、あまり技術が必要とは思えない。やはりギャンブルとしての面白みがあるのだろうが、時間と暇のあるパチ・プロと称するほんの一握りの人だけが恩恵に浴しているだけで、ファン程度では負け続けということが多いのではないだろうか。

かつて結構パチンコに通った経験からすると、差し引き圧倒的にマイナスだった。行かなくなったのには、ド外れた騒音と煙草の煙がどうにも我慢できなくなったからだだと思ふ。

知人にパチンコ狂と思われる男がい

るが、とても儲かっているとは思えない。とにかく連絡が付かない。始まる夢中らしい。人間、夢中になるものがあることはいいことだ、という見方もあるから、彼にとつては日ごろの憂さを忘れさせてくれる貴重な時間なのかもしれない。それが彼に精神的安定をもたららし、彼ら夫婦の長持ちの秘訣かもしれないと思ったりすると、傍からとやかく言うことではなさそうである。こう考えるとパチンコにも功罪がありそうだが、パチンコ店の駐車場に止めた車の中で乳幼児が死亡する事故が絶えないことほど痛ましいことはなく、これだけを考えても「パチンコの

罪罪」ということを思わないわけにはいかない。夫婦でパチンコに来て、乳幼児だけを車の中に残したままゲームに夢中になっていてる内に車が太陽光に熱せられて車内が高温となり、乳幼児が熱中症で死亡するというのがその典型的なケースだ。夫婦だけで楽しい時間を過ごしたかったのかもしれない。もしかしたら乳幼児を煙草の煙の充滿する店内に入れたくなかったという「親心」が働いたのかもしれない。いずれにしろ乳幼児は亡くなり、夫婦は保護責任者遺棄致死容疑で逮捕されて一生を棒に振ることになってしまう。

アメリカ駐在の日本人が、スパー・マーケットの駐車場で幼児を車の中に置いたままちよつとした買い物に行つて戻ってきたら、逮捕されたというニュースを読んだことがある。日本人の感覚からすれば「ちよつとの間だから」という考えがあつたのだと思うが、あちらではそれだけで「虐待」に充分と思われたのかもしれない。

それにしてもこうしたパチンコ店の

駐車場での死亡事故は、しょっちゅう新聞・テレビのニュースに出ているのに、なぜ次々と起こるのだろうか。こんなニュースに接する度に思うのは、なぜ新聞・テレビから学習してくれるのだろうか、ということである。日中、締め切った車内が太陽光で高温となり、場所によっては手も触れられない状態になることぐらい車を運転する者にとつては常識ではないか。さらに新聞・テレビでこうしたニュースを見れば、そこから学習することがいくらでも出来そうに思えるが、事故は絶えない。常識として持つていてもそれを現実結び付けられないのか。社会的関心が薄く、新聞・テレビのニュースを見たこともないから学習の機会もないのか。新聞は購読してないし、テレビはレンタルCDやゲームのために存在していると思つてゐる若者は少なくないらしいから、学習できないのかもしれない。かつて新聞社に籍を置いた者の一人としてこれほど寂しいことはない。

警察庁は二〇一一年七月末、パチンコホールの団体に「駐車場における児童の車内放置事案の防止について（要請）」という課長通達を出した。これによると〇八年からこうした死亡事故は四年連続して起こつており、〇四年からだと十二件にも上るそうだ。通達によると、乳幼児連れで来店しようとする客の車は駐車場への入場を原則として断る——といった防止対策を講じるよう求めている。店に託児施設がある場合や、ゲームをする客以外に乳幼児の面倒をみている者が車にいる場合を除いて、入場させないことを店に求めるのだという。

これも何かおかしくないだろうか。店がガードマンを雇つてまで監視する？店員の言葉を無視して客が入店したら？こうした客に自覚させることはもつと難しい。きつとまた同じような事故が起こるだろう。事故にもその防止対策にも索莫たる思いが強い。

定刻に五分遅れた



片岡 義男

(作家)

一九六〇年代の終わり近く、ひょつ

としたら一九七〇年代に入ってから、

確か月刊総合雑誌の編集部から、作家・吉行淳之介さんとの対談を僕は依頼された。当時の僕はまだ小説を書いてはいず、それ以外のさまざまな文章を書く、間もなく三十歳になろうとするフリーランスのライターだった。

いろいろな領域で活躍している、しかし一般的には知られていないはずの、ちよつと変わった面白い人物を何人か編集部が選び出し、吉行さんの希望を取り入れた上で、毎月ひとりずつ対談しては雑誌に掲載していくという企画

で、選ばれたひとりが僕だったようだ。

暑くも寒くもない季節、僕の記憶では四月あるいは五月の平日の夜七時、場所は銀座の浜作という店を指定された。三、四年前、おなじ浜作に座談会で呼ばれたことがあり、その店の場所なら知っている、と僕は思った。

当日、確かこのあたりだったと思う近辺を探してやや時間を取られ、七時に五分遅れて僕は浜作に入った。入るときに腕時計を観たので、この五分という数字はいまでも忘れていない。忘れていない理由はもうひとつある。忘れることについて、いま僕は書こうとし

ている。

みなさんお揃いですが、と言われて僕は階段を駆け上がった。部屋には全員が揃っていた。吉行さんのかたわらには部屋の係りの女性が注文を受けに来ていた。そして担当編集者と編集長の、男性たちふたり。もうひとりいたような気もする。僕は神妙に両膝をついて、吉行さんに、そしてふたりの男性たちに挨拶をし、遅れて申し訳ございません、というようなことを言った。それに対して吉行さんが穏やかに言った、「定刻でしょう」というひと言も、そのときの吉行さんの口調とともに、僕

はいまだに記憶している。なぜなら、そのひと言に、ふたりの編集者たちの表情が、僕の記憶のなかで消しがたく重なっているから。ふたりともまったくおなじ表情で僕を見ていた。なぜきみがいちばん最後にあらわれるんだ、と軽く僕を責める表情だ。

僕は席につき、すぐにビールが出て乾杯だった。対談はいつとはなしに始まった。当時の吉行さんは、作家としておそらくその頂点にあっただけではなく、時代ぜんたいにとつての、誰にも真似することの出来ないお手本という、遠く高い位置にひとり屹立していた存在だった。対談や座談の名手としても知られた。相手の気持ちこそらず巧みに話を引き出し、軽妙かつ洒脱に流れる時間のなかで、誰にもそうとは気づかれないままに、この本質をきれいに斬り取るという、深い奥ゆきを静かにたたえていた。

当時の僕など吉行さんを前にしてなす術もなかったのだが、対談は雑誌に掲載され、のちには対談集の本に収録

されもした。本質を見きわめるための力を自分の内部から引き出すために、すべてをいったんは肯定して受けとめる営みを、すでに吉行さんは完成させていた。僕にとつての最大の感銘はそこにあった。

さて。僕が書きたいことの核心について。

定刻五分遅れは、どう覆すことも出来ない事実だ。それに対して僕が謝ったのも、小さなものが事実であることは確かだ。このふたとおりの事実に対して、なんの無理もなしに、きわめて滑らかにさりげなく発せられた、「定刻でしょう」という吉行さんのひと言は、どのように機能したのだったか。ぜんたいをそのひと言にくるみ込んで許す、という機能を發揮した、と僕は判断している。

吉行さんは、定刻です、とは言わなかった。僕が部屋に入った最後の人であったのは明らかな事実であり、この野郎、五分遅れたな、という思いはあつたはずだし、あつて当然だろう。しか

し吉行さんは、今日のこの場はきみに免じて五分遅れも定刻のうちだとしておこうじゃないか、という意味を込めて、「定刻でしょう」と言った。

「でしょう」という、平凡と言うなりたいそう平凡な、じつになにげないひと言の、最高に巧みな使いかたの一例を、二十代の僕は、吉行淳之介さんから直接に受けとめた。五分遅れなんかどうでもいいよ、それよりも今日の相手は、やれやれ、お前なのか、というニュアンスも、このひと言には付随している、とも僕は感じている。

この対談から五年をへずして、仕事のつながりから吉行さんとはしばしば会う、という状況の末端に僕は身を置くことになった。だから吉行さんとはいろんな話をしたが、短い期間だったのでその総量はけっして多くはない。しかし、いちばん最初に僕に向けて吉行さんが発したひと言は、少なくともその時その場の一回だけは、僕を大目に見て許すためのひと言だった。

丙吉問牛

「蒙求」という書物に「丙吉問牛」の話があるので紹介しましょう。

「前漢の丙吉（姓はヘイ、名はキツ）は、字を小卿といい、宣帝の時に丞相として仕えていた。ある時外出して、清道（道路を清掃する者）が集団で争い、死傷者が道に横たわっているのに出会った。吉はそこを通りすぎても何も聞かなかつた。さらに進んでいくと、



人が牛を引いて行くのに出会った。牛は喘いで舌を出していた。吉は馬を止めて、騎吏をして、その牛を引いて何里来たかと問わせた。これを見た下役人は密かに『丞相は、問うべきを問わず、問わずもがなを問うとは、前後間違っている。』と答えた。このことを知って、ある者が吉をそしった。

これに対して、吉は次のように答え

た。『民が争って互いに殺傷するのは、長安の令が職務として当然諫め、備え、また犯人を追うて捕らえるべきものである。宰相は小事には自ら手を下してはいけない。従って、道路上の事件などは問うべきものではないのだ。』ところで、今、時は春で小陽の季節である。まだ暑いはずのものではない。あの牛は近くから来たものと思えるのに喘い

山西 靖彦